

音楽科における〔共通事項〕活用についての一考察 —小学校現職教員への意識調査を通して—

時 得 紀 子*・村 川 雅 弘**・福 田 里 美***

(平成23年9月30日受付；平成23年11月15日受理)

要 旨

今次改定の小学校学習指導要領では、音楽科に〔共通事項〕が新設された。小学校音楽科におけるこの〔共通事項〕は、表現及び鑑賞の各活動の中で、一人一人の児童が思いや意図をもって思考・判断し、自らの創造性を発揮するという主体的な音楽学習を進めていくために必要な能力を育てるための指導内容が示されたものである。

小学校では中学校での導入に先立ち、平成23年度4月から改定後の新教科書による音楽授業に既に取り組み始めている。本論ではこうした節目の時期における音楽科の〔共通事項〕の運用について、小学校現職教員を対象とした意識調査を試みることで、教育現場ではどのような実践がなされており、その導入に際してどのような課題が挙げられているかなどについて探るものである。調査の結果、〔共通事項〕に対する認識は指導者によって実に様々であり、その指導法に戸惑いを感じている指導者も筆者らの予想を上回るなど、現時点の〔共通事項〕の解釈や扱いが個々の指導者に委ねられていることから生じる課題も見られ、その改善に向けた方策についても考察した。

KEY WORDS

共通事項 common elements 活用型音楽学習 practical music classes 新学習指導要領 new guidelines for teaching
言語活動 language activity 習得, 活用, 探求 acquisition, practical use, search

1 はじめに

小学校学習指導要領の今次の改訂と共に〔共通事項〕が新たに盛り込まれたことから、音楽的な感受の内容を具体的に示すことで、思いや意図をもって表現したり味わって聴いたりする力、すなわち、主体的な音楽学習を進めていくための力を育てることが求められ、「要素や仕組みへの気づきの活動」や「言語活動で他者とのコミュニケーションの中から新たな気づきを得る」などの活動展開が促されている⁽¹⁾。こうした共通事項の適切な位置づけによって、音楽の構造に着目させたり、音や音楽に触れながら感じ取ったことやわかったことについて、言語を通じて明確化し、仲間と共有したりしていく活動を活性化させ、これらをより意識した活動を展開することが可能になると捉えられる。

この他、「A 表現」と「B 鑑賞」をつなぐ、あるいは共通の基盤となるものとして〔共通事項〕が位置付けられたことによって児童の音楽活動に拡がりをもたらされたことも挙げられよう。例えば、従前までは表現活動のみに示されていた「身体表現」の活動が、表現活動そして鑑賞活動のいずれにも共通する指導内容として明示された。これによって、これまで以上に幅広い音楽活動の領域において、身体表現活動の実践を取り入れることが示唆された。このように〔共通事項〕によって、小学校音楽科では身体感覚を通じた活動の展開がこれまで以上に重視される方向に転じるなど、指導者に多彩な活動の選択肢がもたらされたのである⁽²⁾。

このように〔共通事項〕を活用することで、音楽科の各領域の活動に横断的かつ柔軟性をもって取り組むことが可能になることから、教育現場でも既に様々な取り組みが展開されていることが予想される。取り分け、音楽科の時間が縮減されて久しい教育現場において、限られた授業時間で児童にどのような力を付けるのか、また何をねらいとしてどのような活動を展開していくのかを明確にする上でも、〔共通事項〕によって、現場の取組みにどのような変化がもたらされるのかを意識することは重要であると筆者らは捉える。

こうした背景のもと、本論では音楽科の学習指導要領に新たに設けられた〔共通事項〕について、取り分け小学校における模索が始動したばかりのこのタイミングにおける現状をありのままに捉え直すことは、極めて重要であると捉えている。また、その実践の過程で生じた想定外の課題にも向き合うべく、実践に携わる教員への意識調査を通じても考察を試みていくものである。

2 音楽科における〔共通事項〕と言語活動

〔共通事項〕の導入によって、音楽を通じて思考・判断をさせる活動においては、楽曲を聴き、音楽の要素や仕組みについて聴きとらせ、根拠をもって自分なりに批評することのできるような力の育成や、音楽の要素や仕組みへの気付き等を通して、思いや意図をもって表現する活動へとつながりをもたせることが、一層重視されよう。

こうした活動の要になってくるのが、言語活動である。言語を介し互いに表現についてコミュニケーションを取り合う場面を指導者が意図的に設定し、具体的な活動場面を組み込む工夫が必要となろう。ここにおいても、指導者が〔共通事項〕を活かしながら、「習得」し、学んだ内容を育む学習活動の「場」を設定することによって、児童が活用する力を培いながら音楽学習が展開できるものと捉える。

PISA学力調査⁽³⁾では、平成15年に「読解力」、平成18年には「科学的リテラシー」についてそれぞれ課題が示された。そして平成21年の課題を受け、具体的な取り組みとして、新学習指導要領の着実な実施とともに知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成が挙げられ、具体的な項目としては理数教育の充実、言語活動の充実が掲げられた⁽⁴⁾。

無藤(2009)は、PISA調査の結果、「読解力」の低さが浮かび上がったとし、「読解力は、文章から情報を引き出し、利用し、熟考するという『活用力』の一つ」と述べている。さらに、「活用」とは、「何かを用いて考える力」と述べ、焦点を絞って子どもに思考させる「思考の焦点化」を行う必要があり、教師が活動のポイントや考える方向性を子どもにはっきり提示することによって思考が深まり「活用力」は育つとしている⁽⁵⁾。ここで、無藤は、「活用力」を育てる授業のチェックポイントとして次の5点を提案している。

- ・前提となる知識・技能はしっかりと習得されているか
- ・思考に必要なヒントや道筋は与えたか
- ・子どもの思考の焦点は絞れているか
- ・教師が一方的に正解を与えるのではなく、子どもの思考を生かして授業を組み立てているか
- ・一部の子どもではなく、全員が思考しているか

これらの提案からも読み取れるように、知識・技能の「習得」を基本としながら、「活用」「探究」を両輪としたカリキュラムが求められ、「活用」から授業づくりを考えていくことが重視されてきているといえよう。

活用について、中央教育審議会最終答申(平成20年1月17日)⁽⁶⁾では、教科の指導の中で「活用型の学習」を行うとしている。また、「習得」と「活用」と「探究」という三つの学習はばらばらに成立するものではなく、相互に関連したバランスの取れた学習が必要であるとも述べている。つまり、活用型の学習活動を充実させることによって、探求的な学習活動も充実するし、知識・技能の習得に結びつくというわけである。そう考えると、「活用型の学習」は、単に「習得された知識や技能」を使えばよいというわけではなく、「探求型の学習」の充実を目指したものでなくてはならないのである。すなわち、活用型の授業を創造するためには、教科の学習において、知識・技能の活用場面を組み込みつつ、探求型の学習過程で授業設計を行うことが重要であるといえよう。

このように、今回の学習指導要領の改訂に当たり、すべての子どもたちに身につけさせたい知識・技能の徹底、基礎・基本の徹底として、全教科ともその内容を明確にすることが求められた。音楽科もこの答申の内容に沿って音楽科における基礎的な知識、基礎的な技能とは何かをはっきりと社会に示す必要があり、音楽的な知識については、どの子にとっても客観的に認識可能なものとして、音楽を特徴付けている要素、音楽の仕組みや構成とその働き、音符、休符、記号など音楽にかかわる用語、の3点が明らかにされた。これは〔共通事項〕で示された内容と同じである⁽⁷⁾。この音楽科に新設された〔共通事項〕を確かなものとして児童が「習得」し、そこで学んだ内容を使う学習活動の「場」をつくることで、活用する力を育まれると捉える。音楽科に〔共通事項〕が位置付けられたことによって、表現や鑑賞の活動の基盤となる事項が明確になり、児童が主体的に音楽のよさや面白さを感じ取ることができ、思考する力、判断する力の育成にかかわることができるようになると考えられる。

〔共通事項〕を確かなものとするためには、例えば後に述べる年間指導計画案(表2)のように、〔共通事項〕を横断的・計画的に意識的に位置付け、指導法を工夫・開発しながら実践を積み重ねることも手立てのひとつであろう。横断的・計画的に長いスパンで指導を継続することで、子どもたちの学習意欲の向上につながり、音楽の表現力が培われ、活用の力が身に付くものと捉えられる。音楽の学習活動においては、音楽を形づくっている要素の働きを、音楽の中で感じ取りながら習得することによって、音楽を「聴く」ことに執着する力が育まれる。子どもたちはこの感性をより一層磨きながら、音楽表現活動や鑑賞曲等の聴き取りに活用していくことができるのである。

津田(2011)は、〔共通事項〕事項Aに相当する学習を充実することが、言語活動を充実させるための視点である、とし「感性を働かせながら、思考・判断し、音楽表現の思いや意図、音楽のよさを言葉で表すなど学習の基盤となるのは言語の能力である」と述べている⁸⁾。小学校学習指導要領の鑑賞領域には、低学年・中学年・高学年ともに「言葉で表すなどして」という文言がある。児童ひとりひとりが、そこで感じたことや分かったことを仲間や教員と共有するためのツールのひとつとして、言語活動を位置付けるものと考えていきたい。

3 〔共通事項〕に関する意識調査

〔共通事項〕の新設や日本の伝統音楽についての理解を深めること等が音楽科の目標の中に新たに明示された。指導者にも、新たな視点における授業づくりが求められる一方で、音楽科の授業時数は現状維持である。学校現場ではますます授業内容の工夫が求められている。このような学校教育現場の現状を踏まえ、移行期であった昨年度、音楽科指導者は、〔共通事項〕をどのように捉え実践してきたのか。その実態を把握することで、①今後の〔共通事項〕の展望を考察することができ、②有効な指導法や授業づくりのアイデアの開発につながり、③引いては子どもたちの活用力を育む学習活動の展開への展望につながるものと考えた。こうしたねらいのもと、次に掲げる質問項目を作成し、現職教員を対象とした意識調査を試みることにした。

意識調査は、上越教育大学近隣の小(中)学校の音楽を担当している教師及び、茨城県をはじめ近隣の小(中)学校の音楽を担当している64名の現職教員に依頼したところ、52名からの回答を得ることができた。次に掲げるのは、各教員に送付した記述用紙の具体的な内容項目である。

表1 意識調査の内容項目

平成20年3月28日告示の新学習指導要領に新設された〔共通事項〕についておうかがいします。

Q1. 貴校では今回の改訂を受けて、年間指導計画を再検討なされましたか。(もっともあてはまるもの1つに○をつけてください。)

1 新しく作成し直した	2 現在新たなものを作成している
3 現行の年間計画を、手直ししている	4 今後手直しをする予定がある
5 手直しをする予定は今のところない	6 その他

Q2. 今回の改訂で新設された〔共通事項〕を、年間指導計画に位置づけておられますか。(もっともあてはまるもの1つに○をつけてください。)

1 扱う教材と〔共通事項〕との関連性を明記している	4 その他
2 日々の授業を実践しながら、そのつど、加除・修正するようにしている	
3 特に何もしていない	

Q3. 今年度、4月から現在までに、〔共通事項〕を取り入れた授業を実践されましたか。

1 はい → Q4に進んでください。	2 いいえ → Q5に進んでください。
--------------------	---------------------

Q4. 実践内容をお聞きます。

(1) 実践された領域はどの分野ですか。(あてはまるものすべてに○をつけてください。)

1 表現	2 器楽	3 鑑賞	4 音楽づくり	5 その他
------	------	------	---------	-------

(2) 実践なされた学年及び題材名(教材名)について教えてください。
実践なされた学年を○で囲み、その題材名(教材名)をご記入ください。(あてはまるものすべてにご記入ください。)(自由記述)

(3) (2)の実践の具体的な活動及び実践なされた児童生徒の反応など、記述できる範囲で結構ですので、教えてください。(自由記述)

Q5. 今後、共通事項を取り入れた活動を実践する予定はありますか。

1 はい → 実践予定の活動内容を現時点で分かる範囲で教えてください。	2 いいえ
-------------------------------------	-------

Q6. 〔共通事項〕が新設されたことで、ご指導の内容・ご指導方法に変化はありましたか。

1 〔共通事項〕に示された内容を常に意識して実践している
2 〔共通事項〕を意識しているが、授業にはまだ反映していない
3 〔共通事項〕は特に意識せず授業を実践している
4 その他

Q 7. 新学習指導要領に〔共通事項〕が新設されたことに対してどのように思われますか。〔共通事項〕に対しての
 考え、〔共通事項〕のご指導で工夫されている点、またはご苦労なされている点、疑問に思われている点など何
 でも結構ですので、忌憚のないご意見をお聞かせください。（自由記述）

(1) 調査結果についての仮説

本意識調査の実施に先立ち、後述する結果考察の検討に活用すべく、筆者らは次のような仮説をたてた。

・ Q 1 の仮説

移項期間において教科書は従来のものを使用しているため、新たに年間指導計画を作成し直している学校は少ないものと予想される。また、小学校において学級担任は、全教科の授業を担当する場合がほとんどであるため、各教科で年間指導計画の検討に取り組むためには、夏季休業中などを利用して、計画的に行うことが考えられるだろう。また、先進校においては、平成23年度からの新教科書の学習内容を考慮した上で現行の年間指導計画の手直しを開始しているものと捉える。

・ Q 2 の仮説

〔共通事項〕についての内容項目は、学習指導要領に提示されているが、実際の学習活動において、どの題材や教材で取り上げ、どのように指導すればよいのか、指導方法や方向性がはっきり定まらない移行期間であるため、年間指導計画へ位置付けることに着手している指導者は3分の1から半分くらいであろうと捉える。

・ Q 3 の仮説

学級担任が全教科を受け持つことがほとんどの小学校現場においては、音楽科〔共通事項〕の指導法について、各指導者に一任されていることが多いと考え、学習指導要領の全面実施までの移行期間において、授業実践している指導者は3分の1程度と捉える。

・ Q 6 の仮説

Q 3 の仮説の理由と同様、学級担任が音楽を担当する学校がほとんどである小学校では、移行期間においては、〔共通事項〕が新設されたことに対する認識度はそれ程高くないと思われ、指導内容、指導方法への変容まではみられないと捉える。常に意識して授業を実践しているのは、約1～3割程度であろう。

・ Q 7 の仮説

自由記述の欄である。新設された〔共通事項〕に関しては、各指導者によって認識の差が見られると思われ、戸惑いどい声が多いと捉える。どの教材（題材）で、どの〔共通事項〕の内容項目を指導すれば、効果的であるのか、子どもたちへの意欲につながるのか、といった詳しい指導法の提示が必要である、との回答があがると思われる。

(2) 意識調査の結果及び考察

質問項目1では、新学習指導要領全面実施に向けて、年間指導計画を新たに作成し直す、現在手直し中であるという回答は、図1のように計53%となり、約半数の指導者が何らかの改善を行っているという結果が得られた。また、今後、手直しを予定しているという回答も25%となり、全体の約8割の指導者が新学習指導要領の告示に伴い、平成23年度からの完全実施に向け準備をしていることが捉えられ、筆者らの仮説は支持されなかった。この背景として、各学校において新学習指導要領の全面実施に備え、参考資料や解説等を読み込み、校内研修等を実施するなどして、全校、地域をあげて準備を行っているということが考えられる。

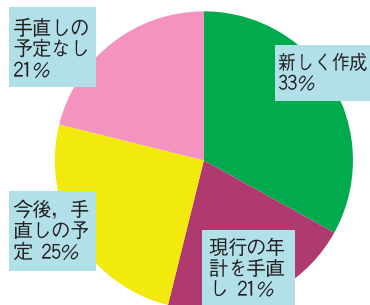


図1 年間指導計画の作成 (Q1)

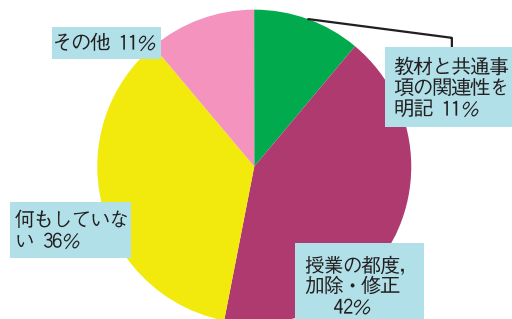


図2 〔共通事項〕を年間計画に位置づけたか (Q2)

質問項目2では、新設された〔共通事項〕と扱う教材との関連性を年間指導計画に明記している、日々の授業を実践しながらそのつど加除・修正している、を合わせると53%となり、全体の約半数という結果が得られた。これは筆者らの約3分の1から半分くらいであろうとする仮説が支持されたことになる。今後も、〔共通事項〕を継続的・計画的に指導することの必要性を意識して年間指導計画等に明記しておくことで、指導内容の徹底が図られ、児童の学習意欲の向上につながるものと考えられる。

質問項目3では、〔共通事項〕を取り入れた授業を実践したという回答は約8割であり筆者らの仮説は支持されなかった。この背景として教科書内容は現行のままであっても、指導者は〔共通事項〕を意識して授業を実践していることが浮かび上がった。これは、音楽科に新設された〔共通事項〕に対する意識の高さが捉えられたこととなった。具体的実践内容は、表現領域が6割を越えていた。今後、鑑賞や音楽づくり領域で〔共通事項〕をどのように取り入れれば効果的な学習活動が展開できるのか、指導法の工夫改善が必要になると捉える。

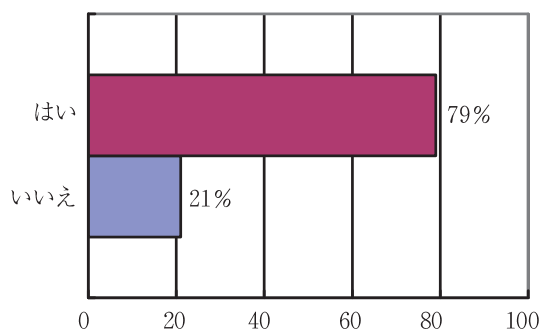


図3 〔共通事項〕を取り入れて授業実践したか (Q3)

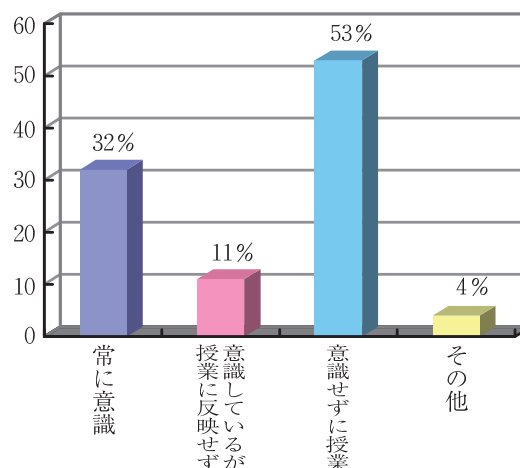


図4 〔共通事項〕を意識して授業実践しているか (Q6)

質問項目6では、新設された〔共通事項〕を、常に意識して授業実践していると回答した指導者は32%であり、筆者らの予想とほぼ同数を占めたことから、仮説は支持されたと言える。同時にこれらの指導者が、〔共通事項〕の新設を受けて、授業の指導内容を積極的に工夫していこうとしている姿勢が読み取れる。しかし、その一方で、「ふだんの授業を行ってれば、〔共通事項〕は指導できると考え、あまり意識していない。(Q7の回答より)」という消極的な回答も見られた。その活用に躊躇している指導者には次のような見方が求められよう。すなわち、〔共通事項〕の主な内容はこれまでの学習指導要領でも既に示されていたものであり、決して新しい内容ではないものの、従来の指導法に新しい視点を当て、連続性、発展性に配慮して扱うようになったと捉えられることから、指導者はそうした改善点に着目しながら指導計画を捉え直し、より明確な方向性をもって指導を進めることが望まれるのである。

次に、質問項目4(3)にある、授業を実践しての児童生徒の反応の記述からは、実践で得られた具体的な児童の反応が浮かび上がった。次にその一例を挙げる。

- ・「やさしい風に」(第5学年)では、歌詞の内容と曲想、強弱記号を生かした歌い方をグループ活動の中で学習した。全体での活動とグループ活動を組み合わせることで効果的であった。児童は、めあてがはっきりしているので活動しやすいようである。
- ・1年生は拍の流れを感じ取りながら、身体表現する活動が中心になるので、範唱や伴奏を聴いて、歌ったり手拍子したりする活動から身体表現(動物のまねなど)へと活動を広げた。今、自分が音楽の何を学んでいるのかが自覚できているようであった。
- ・「おかしなすきなまほう使い」(第3学年)では、まほうをかける音のイメージに合わせて、音の出し方を工夫する活動を実践した。児童は、同じ楽器でも、打つ場所やマレットなどを変えて音色のちがいを見付けることができた。
- ・「ハックルベリーフィン」(第3学年)の鑑賞では、様子を思い浮かべて聴いた後、場所が変わったと感じたところで、音楽はどう変化したかを聴き取る活動を行った。児童は、曲の速さや音の大きさ、楽器の種類の変化などと結びつけて聴くことができた。

- ・表現活動においても鑑賞を関連させて、曲の出会い方を工夫するようにした。また、新しい楽曲を扱う際、その都度、どんな感じの曲か、を言葉で表すようにさせ、その感じ方の根拠として〔共通事項〕のアイを取り上げるようにした。低学年の内容は十分に理解させることができたが、中学年の内容が指導不足だったと感じている。
- ・音符、休符、記号の読み方が不十分だった児童が具体的に読めるようになってきている。合奏の楽譜の読み方が上達した。

これらの記述から指導者が、〔共通事項〕の内容項目を意図して授業を実践することで、これまでの学習活動や指導法に変化が見られ、そのことが児童の変容につながったと同時に児童自身の学習を捉え直すきっかけにつながったことが明らかになった。

質問項目7では、教材の指導事例に関する意見、小学校の学級担任が音楽を担当するに当たっての苦労や悩み、そして、言語活動や授業時数に関する意見など多様な記述が得られた。ここに一例を掲載する。(下線は筆者らによる)

1) 教材の指導事例に関する意見

- ・〔共通事項〕が設けられたことは聞いていたが、特にこの教材でねらって指導しようという意識にはなっていないのが実情である。
- ・音楽専門ではないので、〔共通事項〕のことを聞かされてもピンと来ないため、従来の指導でその場をしのいでしまう。この教材では、こんな〔共通事項〕の実践ができる、というような例(事例)などが、簡単に指導書等に提示されているとありがたいと思う。
- ・音楽を研究教科としていない人にとっては、今の段階では、〔共通事項〕を少し難しく感じている場合もあるようだ。質問2にあったように、年県指導計画の中に明記したり、指導用教科書に明記されていたりすると、より指導も充実していくと思う。

2) 小学校の学級担任が音楽を担当するに当たっての苦労や悩み

- ・音楽担当以外の先生方が、どんなふう感じているか、が気になる。戸惑っている方がいるとしたら、校内の音楽担当としては、従来通りの考え方で大丈夫なのだ伝えていきたい。
- ・音楽の授業時数が少なくなり、基礎・基本をしっかり身に付けることが難しくなっている。教師自身が音楽を形づくっている要素と美しさを十分感じ取る感性・力量が必要である。また、子どもの発達段階に合った力をつけていくためには、1時間の授業のもちかたを十分考慮すべき(大事にすべき)と思われるが、小学校の場合、全ての先生に専門的なことを求めるのはやや無理とも思われる。

3) 言語活動や授業時数に関する意見

- ・指導者がどこに重点をおくかにより、指導法の工夫が限りなくあると思われた。日頃の言語指導が大切だと思う。
- ・音楽の時数が少ないため、なかなか思うように共通事項を生かしたり関連付けたりして、活動に生かすことができていない。

これらの意見は全回答の一部であるが、指導者によって〔共通事項〕に対する認識は様々であり、その指導法に関して戸惑っている指導者の数は、筆者らの仮説より多いという結果が得られた。

また、〔共通事項〕を「意識して指導」していくことの利点を述べている指導者と、〔共通事項〕は取り立てて新しい内容ではないので、「意識して指導することはない」と述べた指導者が見られるなど、新設された〔共通事項〕に対する捉え方の差異も見られた。これは、〔共通事項〕の指導法について個々の指導者に任されている点要因の一つではないかと推察される。今後、指導者の認識がどのように変容していくのかは未知数だが、少なくとも始動した現時点ではその活用において共通理解が得られていないことが明らかとなった。

4 今後の課題と総括

本論で触れてきたように今次改訂では、教科においても「習得」だけでなく「活用」を重視しているが、こうした教科における「活用」は主としてその教科で習得した知識や技能をその教科の中で生かすと同時に、さらに発展的なアプローチとして、音楽科で習得した知識や技能を他教科で「活用」するように教科を越えた教科間相互の「活用」

もあろう。本論で考察を試みた〔共通事項〕を文字通り活用することで、今後は他教科・領域における学びとの関連を意識したカリキュラム開発に挑んでいくことも、音楽科に課せられた課題であると捉える。なぜならば、我が国の学校音楽が明治以来、西洋機能と声に偏った学習を展開してきたことに加えて、音楽科が他教科・領域との関連において積極的な実践を試みてこなかったことから、教科の弱体化・縮小化を招いた経緯を重く受け止めなければならないと捉えるからである。

その一方で、〔共通事項〕は、音楽を構成要素や仕組みに分けて考えていく捉え方であることから、西洋近代科学の「分析」「分化」の流れをくむものと考えられる。しかしながら、昨今の音楽科教育は日本の伝統音楽や多様な諸民族の音楽文化を導入していく方向を目指している。例えば西洋機能と声の絶対音には当てはまらない曖昧な音も、日本の伝統音楽の表現ではよしとされる解釈にも見られるような東洋的なものの考え方、つまり全体を未分化なものとして捉える表現と西洋のそれとは、相容れない部分があるために支障が出てくることも否めないであろう。このことを鑑みると、西洋機能と声に偏った学習の問題、これから益々重視されていくであろう東洋的なものの考え方に根差した教育観、指導観など、「共通事項を手がかりにして」学習を進めていく上で、明らかに矛盾する部分が生じてくるのが考えられるため、今後の見直しが必要とされる。見直しが必要とされる。

冒頭でも述べたように、音楽科の授業時数が減ったことにより、基礎・基本を十分に身に付けることが難しくなっているという課題は、授業に携わる多くの教師が直面している。こうした厳しい現状ゆえにこそ、新設された〔共通事項〕を手がかりにして、1単位時間の音楽授業で何を学ばせたいのか、そのためにはどのような学習活動を実践すればよいか、吟味した計画のもとで指導実践に役立てることが鍵となるものと捉えている。

また、〔共通事項〕は、繰り返し指導することで身に付くものであり、そこで身につけた学習内容を児童が次の学習に活用していくことで、さらなる力が培われると考えられることから、指導内容の積み重ねが重要となろう。目の前にいる児童は、前年度までにどのような学びをし、どのような力を付けてきたのか学校全体の連携を図り、6年間を見越した継続的な指導が大切となる。そのためにも、年間指導計画に〔共通事項〕の内容項目を明記し、指導内容を可視化していくことで指導事項を明確にしてこそ、計画的、継続的な指導につなげていくことが可能になるといえる。

我が国の公立小学校では、大都市や附属学校などの例外を除き、学級担任が音楽授業を担当するケースが大半を占めている。音楽を専門としない多くの教員によって受け持たれる小学校音楽科において取り扱われる、〔共通事項〕に対する認識は現時点において実に様々であり、従ってその指導法も多様に展開されているという現実も、今回の調査結果から浮かび上がった。学習指導要領では、〔共通事項〕の記載に付随した記載、例えば、ある特定の教材（題材）を扱う際には、この〔共通事項〕の実践ができる、とした具体的な指導事例などは掲げられていないのが現状である。その対策として、今後は音楽を専門としていない学級担任にも十分な配慮がなされ、こうした指導者の手立てとなる指導法の参考事例などが掲載されるならば、多くの教員が迷うことなく指導の方向性を見出すことができるであろう。

その一方で、ある特定の〔共通事項〕がどの教材（題材）に該当するといった見定めについては、特定できないケースも想定されるため、指導者が学習のねらいをどのように設定するかによって、その指導方法は限らない選択肢に広がることも考えられる。こうした課題については今後、学校現場において校内の音楽科主任を担う指導者のリーダーシップのもと、校内研修等の積極的な実施によって、各学校が指針を定めていくことなどで解決が図られるのではなかろうか。

本研究の意識調査からは、〔共通事項〕の指導に当たり、目標やねらいを押さえて授業をすれば〔共通事項〕は指導できると考え特に意識して授業をしていない、と回答した指導者も見られたが、こうした意見からは、〔共通事項〕を意識し過ぎて知識偏重になっては本末転倒であるとした警告のような指摘も読み取れるのである。

山本は、〔共通事項〕の新設こそ今次改訂の大目玉であるとし、これを音楽教科書でどう取り扱うか、授業実践として展開するとなると問題が山積している、と指摘する。さらに、〔共通事項〕は、音や音楽をとらえるたくさんの窓口であるとし、〔共通事項〕のしっかりとした学習によって初めて音や音楽に対する思考力・判断力・批評力が身に付くということを時間をかけて実践事例や指導モデルを豊富に準備しながら、教育現場に周知徹底させなくてはならない、とも述べている⁹⁾。加えて、〔共通事項〕の取り扱いには慎重な配慮を要するとして、第4次学習指導要領で設定された「基礎」領域の再現と受け止められかねないと危惧する指摘なども、今後十分に留意する必要がある。

先述したように音楽科の時数が縮減されて久しい現状にあって、指導者は限られた授業時間に児童に音楽の何の力を付けるか、そこでどのような活動をし、さらには何をねらいとしていくのかを明確にする上でも、常に〔共通事項〕を意識することは重要なことであり、その指導方法を模索しつつ授業の一層の充実を図っていくことが今後の課題となるものと考えられる。

本来、音楽の学習は、声や楽器で表現したり音楽を創ったり、音楽を聴き味わったりするなど、音を媒体としたコミュニケーションを図るといった特質をもっていることから、音楽を言葉で表すということ自体が直接の目的ではないといえよう。しかし、表現と鑑賞の学習を充実するためには、言語活動を適切に取り入れるよう指導を工夫することが不可欠であり、この視点からも、〔共通事項〕を活かした指導は今後さらなる充実が期待されよう。

齊藤によれば、「言語活動は決して新しいことではなく、これまでも教科等で大切にされてきたことである。授業を「変える」ということよりもむしろ、指導する側の授業づくりの構えや意識を「変える」ことが期待されているのだ。」と述べている⁽¹⁰⁾。こうした提言もまた、〔共通事項〕に戸惑う指導者にひとつの指針を与えるのではないだろうか。

本研究における〔共通事項〕の活用をめぐる意識調査は、平成22年度に実施したため、小学校学習指導要領全面実施に向けての移項期間中の限定された時期を対象とした現職教員への調査結果であった。今後は、全面実施後の平成23年度以降にも同様の実態調査を行うことで、引き続き教育現場の意識をリアルタイムで把握し、その対策について考察するなど、長期に亘った研究として継続的に試みていきたい。

次の指導要領の改訂に向けて、音楽科で身に付けさせたい「学ぶ力」とは何か、生涯学習者育成に向けた音楽的な自立をした日本人とはどのようなものかなど、目指す日本人像を考える時、現状の〔共通事項〕には先述したような問題点が残されていることは否めず、今後さらに検討を進める必要があるだろう。

引用文献

- (1) 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領 平成20年3月告示』 pp.75-82.
- (2) 時得紀子 (2010) 『初等教育を視座とした教員養成におけるリトミック指導の一考察』 ダルクローズ音楽教育研究 通巻第35号 日本ダルクローズ音楽教育学会 pp.34-35.
- (3) 国立教育政策研究所 (2011) OECD生徒の学習到達度調査 (PIISA) <http://www.nier.go.jp/> (平成23年9月17日)
- (4) 佐藤日呂志 坪能由紀子 (2009) 『小学校学習指導要領の展開 音楽科編』 明治図書 pp.9-17.
- (5) 無藤 隆 (2009) 『「活用」から考える授業づくり』 ベネッセ教育開発センター <http://benesse.jp/berd/center/open/syo/view21/2009/01/s02toku-01.html> (平成23年9月17日)
- (6) 文部科学省 (2008) 中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」(平成20年1月17日)
- (7) 川池 聡 (2008) 『移行期間資料〔共通事項〕の指導について 小学校版』 教育芸術社 pp.2-10.
- (8) 津田正之 (2011) 『音楽科における言語活動の充実とその具体化』 初等教育資 6月号 東洋館出版 pp.36-39.
- (9) 山本文茂 (2008) 『第八次学習指導要領・音楽(案)の特質は何か—音楽学習の〈本質化〉を目指す—』 ONKAN 4月号 pp.4-11.
- (10) 齊藤一弥 (2011) 『言語活動を充実させた授業づくりを心がけよう』 はるかプラス 7月号 ぎょうせい pp.42-43.

参考文献

- 畑中良輔 他 (2010) 文部科学省検定済教科書『小学校の音楽6』 教育芸術社
- 伊野義博 (2010) 『我が国や郷土の伝統音楽を授業で扱う具体的な方法論』 季刊音楽鑑賞教育 Vol.2 財団法人音楽鑑賞振興財会
- 村川雅弘・黒上晴夫 (2009) 『総合的な学習 ビジュアル解説24 [小学校]』 日本文教出版
- 文部科学省 (1998) 『小学校学習指導要領 平成10年12月告示』
- 村川雅弘・野口 徹 (2008) 『教科と総合の関連で真の学力を育む』 ぎょうせい
- 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説 音楽編 平成20年8月』 教育芸術社

(表2) 第6学年 年間指導計画及び評価計画 ◎ 中心となる指導内容 ○ 関連する指導内容、関連する評価の観点

第6学年		学期	第1学期				第2学期				第3学期				
		月	4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3		
(学年目標) (1)創造的に音楽にかかわり、音楽活動への意欲を高め、音楽経験を生かして生活を明るく潤いのあるものにする態度と習慣を育てる。 (2)基礎的な表現の能力を高め、音楽表現の喜びを味わうようにする。 (3)様々な音楽を親しむようにし、基礎的な鑑賞の能力を高め、音楽を味わって聴くようにする。	題材	心を合わせて	物語と音楽	いろいろなひびきを味わおう 歌声と楽器が重なり合うひびき	楽器のひびきを味わって合奏しよう	いろいろな音が重なり合うひびき	和音の美しさを味わおう	世界で一つの音楽をつくろう	曲想を味わおう	詩と音楽を味わおう	日本の音楽をもっと味わおう	音楽で世界を旅しよう	心をこめて演奏しよう		
	教材選択の範囲	学年の歌 愛唱歌	国語科と関連する物語やイメージをとりやすい物語	歌声と楽器のひびきを感じ取りやすい曲	楽器の演奏効果を考慮しやすい曲	音の重なり合いが感じ取れる曲	和音の響きを味わえる楽曲	旋律づくり	曲想を感じ取りやすい楽曲	楽器の音や人の声が重なり合う響きを味わうことができる曲	和楽器の音楽を含めた我が国の音楽	諸外国の音楽	さよなら友よ君が代		
指導内容		時数	3	3	4	3	3	5	6	7	4	4	4		
表 現	(歌唱) ア 範音を聴いたりハ長調及びイ短調の楽譜を見たりして歌うこと。		○		◎			○		○			○		
	イ 歌詞の内容、曲想を生かした表現を工夫し、思いや意図をもって歌うこと。		◎	○					○	◎			◎		
	ウ 呼吸及び発音の仕方を工夫して、自然で無理のない、響きのある歌い方で歌うこと。		○		◎			○		○			○		
	エ 各声部の歌声や全体の響きや伴奏を聴いて声を合わせて歌うこと。			○				◎		○			○		
	(器楽) ア 範音を聴いたりハ長調及びイ短調の楽譜を見たりして演奏すること。				○	◎									
	イ 曲想を生かした表現を工夫し思いや意図をもって演奏すること。				○	○				◎					
	ウ 楽器の特徴を生かして旋律楽器及び打楽器を演奏すること。				○					○			○		
	エ 声部の楽器の音や全体の響き、伴奏を聴いて、音を合わせて演奏すること。					◎				○			○		
	(音楽づくり) ア いろいろな音楽表現を生かし、様々な発想をもって即興的に表現すること。			○		○				◎					
	イ 音を音楽に構成する過程を大切にしながら音楽の仕組みを生かし見通しをもって音楽をつくること。			◎						◎					
主な表現教材例(歌唱教材・器楽教材・音楽づくり) *共通教材		つばさく ださい 明日という 大空	銀河鉄道の歌 (宮澤賢治の 世界)	星空はいつ も おぼろ月夜	ラパースコ ンチェルト リズム伴奏 づくり	われは海の 王	こげま いケル	旋律づくり ふるさと	広い空の 下 木星 風を切って	思い出のメロ デー	越天楽今様 さくらさくら わらべうた 他	アンデスの 祭り アリラン	さよなら友 よ君が代 他		
鑑 賞	ア 曲想とその変化などの特徴を感じ取って聴くこと。						○	○			◎	○	◎		
	イ 音楽を形づくっている要素のかわり合いを感じ取り、楽曲の構造を理解して聴くこと。						◎	○			○	◎	○		
	ウ 楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったことを言葉で表すなどして楽曲の特徴や演奏のよさを理解すること。						○				◎	○	○		
	主な鑑賞教材例					歡喜	野ばら/コ ラール			箱根八里/花	雅楽「越天 楽」から	世界の国々 の音楽			
共 通 事 項	ア 音楽を形づくっている要素のうち次の(ア)及び(イ)を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さを、美しさを感じ取ること。	(ア)音色、リズム、速度、旋律、強弱、音の重なりや和声の響き、音階や調、拍の流れやフレーズなどの音楽を特徴付けている要素	旋律、強弱、拍の流れやフレーズ	音色、リズム、速度、拍の流れやフレーズ	拍の流れやフレーズ、音の重なりや和声の響き	旋律、強弱、拍の流れやフレーズ	旋律、強弱、拍の流れやフレーズ	旋律、音階や調、音の重なりや和声の響き	旋律、強弱、拍の流れやフレーズ	音色、強弱、拍の流れやフレーズ	旋律、強弱、拍の流れやフレーズ、音階、速度	旋律、強弱、拍の流れやフレーズ	旋律、拍の流れやフレーズ	音の重なりや和声の響き、拍の流れやフレーズ	
	イ 音符・休符・記号・用語	(イ)反復、問いと答え、変化、音楽の縦と横の関係などの音楽の仕組み	問いと答え	反復、音楽の縦と横の関係	反復、問いと答え、変化	音楽の縦と横の関係	反復、問いと答え、変化	反復、問いと答え、変化	反復、問いと答え、変化	反復、変化	音楽の縦と横の関係	反復、音楽の縦と横の関係	反復、問いと答え、変化	反復、問いと答え、変化	反復、問いと答え、変化
	評価の観点		1学期				2学期				3学期				
評 価	ア 音楽への関心・意欲・態度		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
	イ 音楽表現の創意工夫		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
	ウ 音楽表現の技能		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
	エ 鑑賞の能力						○	○			○	○	○		

A Study of Utilizing Common Elements for Music Class Effectively: Through A Survey for Elementary School Teachers

Noriko TOKIE* · Masahiro MURAKAWA** · Satomi HUKUDA***

ABSTRACT

In the new revision of the Elementary School Course of Study, in the subject of music, “common elements” (*kyōtsū-jikō*) were introduced to the fields of “Expression” and “Appreciation”. MEXT wants students to recognize and get a feel for the elements and structure of music, and develop new ideas through the use of language with other students.

To determine how effectively they are used by elementary school teachers, the authors’ attempted a survey for elementary school teachers. According to the results of this survey, elementary school teachers’ are utilizing “common elements” effectively and it is helpful for teaching. The authors are of the opinion that “common elements” has been understood by teachers and well managed among teachers successfully.